た後、薄層板を風乾する。この薄層板を、基層（約３㎜厚）と種層（約１㎜厚）からなる大型平板培地にのせて室温に約１時間放置した後、薄層板を取り除き、37℃で16時間培養し、観察するとき、試料溶液及び標準液から得た阻止円のRf値は等しい。

寒天平板　基層用培地及び種層用培地は、それぞれ１号培地を用い、種層用培地には、菌液を１％加える。

菌液の調製　*Micrococcus luteus* ATCC 10240を試験菌とし、一般試験法の力価試験法により菌液を調製する。

② 本品５ｇ（4.5～5.4ｇ）を量り、550℃で４時間灰化した後、３mol／Ｌ塩酸試液10mLを加え、時計皿で覆い、10分間穏やかに加熱する。放冷した後、ろ過し、水を加えて50mLとし、これを水酸化ナトリウム溶液（１→５）で中和した溶液（必要ならば、ろ過して行う。）は、亜鉛塩の定性反応③を呈する。

純度試験

① pH　本品の水懸濁液（１→10）のpHは、5.5～7.5でなければならない。

② 鉛　本品約10.0ｇを0.1ｇの桁まで量り、その数値を記録し、550℃で４時間加熱して灰化し、放冷した後、塩酸（１→10）10mLを加え、時計皿で覆い、10分間穏やかに加熱する。放冷した後、ろ過し、ろ液を10mLの全量フラスコに入れ、水を標線まで加えて10mLとし、試料溶液とする。別に、ジチゾン用鉛標準液５mLを全量ピペットを用いて量り、10mLの全量フラスコに入れ、水を標線まで加えて10mLとし、標準液とする。試料溶液及び標準液につき、原子吸光分光光度計で鉛測定用中空陰極ランプを用いて、波長283.3nmにおける吸光度A_T及びA_Sを測定し、次式により試料中の鉛の量を算出するとき、その量は、10μg／ｇ以下でなければならない。

$$\text{鉛（Pb）の量（μg／ｇ）}=0.5\times\frac{A_T}{A_S}$$

③ ヒ素　本品1.0ｇ（0.95～1.04ｇ）を量り、ヒ素試験法第３法により試料溶液を調製し、装置Ａを用いる方法によりヒ素の試験を行うとき、吸収液の色は、標準色より濃くてはならない（２μg／ｇ以下）。

乾燥減量　12.0％以下（１ｇ，0.67kPa以下，60℃，３時間）

強熱残分　35.0％以下（１ｇ）

窒素　5.0～10.0％（ケルダール法）

粗脂肪　10.0％以下

粗繊維　7.0％以下

力価試験

寒天平板　基層用培地及び種層用培地は、それぞれ１号培地を用いる。

試験菌　*Micrococcus luteus* ATCC 10240を用いる。

常用標準希釈液の調製　試験を行うために必要な量の常用標準品を有効数字３桁まで量り、その数値を記録し、１mL当たりの濃度が約100単位となるよう、３号緩衝液を加え、正確に一定容量とし、希釈原液とする。試験を行うために必要な量の希釈原液を全量ピペットを用いて量り、１mL当たりの濃度が２単位及び0.5単位となるよう、３号緩衝液を加え、正確に希釈し、高濃度常用標準希釈液及び低濃度常用標準希釈液を調製する。